

要旨

東アジアに位置する韓国、台湾及び日本は、少子高齢化の進展という共通の人口動態の変容に直面しており、生産労働人口の減少に伴って、東南アジアからの国際移動が起きている。この現象は、東南アジアから女性を「介護労働者」あるいは「花嫁」として輸入する再生産労働の分野において特に顕著である。東南アジアから東アジアへの人口移動には、＜移民労働の女性化＞及び＜再生産労働のグローバル化＞という2つの力学が働いており、ケア労働は多くの移民女性によって担われるようになってきている。

本研究は韓国、台湾、日本における移民女性の流入にかかわる政策、制度、言説及びサポートシステムを比較することで、これらの社会が人口動態の変容の中で、ケアや再生産労働をどのように位置付けているのかを明らかにしようとするものである。

再生産労働という概念は、これまで「外国人労働者」と「国際結婚の花嫁」、あるいは「ケア労働者」と「セックスワーカー」のように移民女性を分断してきたカテゴリーを包摂してとらえることを可能にする。本研究は、再生産労働という概念を導入することで日本、台湾、韓国におけるケア労働者と、韓国、台湾における外国人花嫁を同一線上でとらえ、東アジアにおける新しいケア労働の再編成過程を比較検討しようとするものである。ケアのグローバル化に関する先行研究は、外国人看護師や介護労働者を多数受け入れている欧米や、家事労働者の導入が進んでいる香港やシンガポールが中心であり、韓国・台湾・日本において比較の視点を持って書かれた研究は多くはない。本研究は東アジアにおける再生産労働のグローバル化に関する実証的な比較研究として、試行的なものとして位置づけられる。

序章では、まず本研究が扱う問題の背景と研究の枠組みを概観する。第2章では、日本における再生産労働のグローバル化として、30年の時を隔てて流入した東南アジアからのエンターテイナーとケアワーカーに着目し、その背景、政策、制度を比較する。第3章では、台湾におけるケア労働の担い手が「不義理な嫁」から「冷血な移民の殺人者」へと転換して行った背景をケア労働市場の成立の観点から明らかにし、移民女性に対するマスメディアの言説の構造を分析する。第4章では、韓国におけるケアの危機と移民政策との関連を明らかにし、外国人花嫁を「社会統合」の対象とした政府の多文化政策について分析する。第5章では、ソーシャルワークの観点から外国人花嫁に対する政府の政策や支援策を検証し、ソーシャルワーカーが、移民の管理をめざす国家と、移民の支援をめざすソーシャルワーカーとしてアイデンティティという2つのポジションのはざまに置かれるというジレンマについて詳述する。最後の結論では、国家と市場の役割、ケア資源の分配、東アジアにおける多文化主義など、今後の研究の方向性につ

いて言及する。

本研究成果は、ジェンダーと移民という観点からグローバル化による社会の再編成過程を明らかにしようとする対話的な試みであり、ホスト社会にとっても移民にとっても、より人間的で公正な社会を形成するための理解に多少なりとも貢献することが出来れば幸いである。